

勢多だより No.88 (2010.11.30)

著者	「勢多だより」編集担当者会議
発行年	2010-11-30
その他の言語のタイトル	Seta dayori No.88 (Nov.30, 2010)
URL	http://hdl.handle.net/10422/1314

勢多だより

Nov 30, 2010 No. 88



若鮎祭特集・夏の課外活動

第36回「若鮎祭」を終えて
第62回 西日本医科学学生総合体育大会

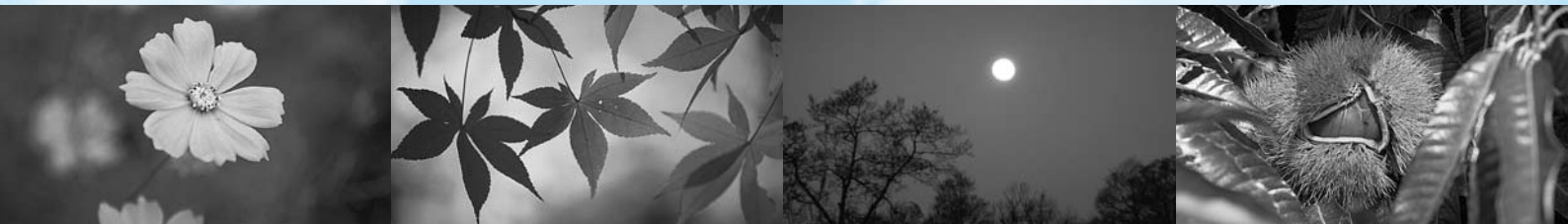
- 新任教員紹介
- 海外自主研修
- ヨット部による追悼慰霊式



勢多だより

NOV 30, 2010 No. 88

C O N T E N T S



メインテーマ：「若鮎祭特集・夏の課外活動」

トピックス

- | | | | | |
|----|--------------------|-----------------|---------|---------|
| 01 | 第36回「若鮎祭」を終えて | 第36回若鮎祭実行委員会委員長 | 医学科第4学年 | 石 河 慎 也 |
| 03 | 「若鮎祭」実行委員の感想 | | | |
| 07 | 平成22年度学生表彰 | | | |
| 08 | 第62回西日本医科学学生総合体育大会 | | | |
| 09 | 「西医体評議委員を終えて」 | 西医体評議委員 | 医学科第4学年 | 石 村 奈 々 |
| | 「悲願の初優勝」 | 男子バレーボール部主将 | 医学科第4学年 | 新 田 信 人 |
| | 「史上最強の夏」 | 水泳部 | 医学科第4学年 | 高 田 真 央 |

新任教員紹介

- | | | | |
|----|-----------------|---------|-----|
| 12 | 内科学講座(糖尿病内分泌) | 西 尾 善 彦 | 准教授 |
| 13 | 脳神経外科学講座 | 中 澤 拓 也 | 准教授 |
| 14 | 家庭医療学講座 | 田 村 祐 樹 | 准教授 |
| 15 | 地域生活看護学講座 | 藤 井 広 美 | 講 師 |
| 16 | 社会医学講座(公衆衛生学部門) | 大久保 孝 義 | 准教授 |
| 17 | 医療安全管理部 | 手 塚 則 明 | 准教授 |

図書館からのお知らせ

- 18 | 「Medical Online を導入しました！」

キャンパスライフ

- | | | | |
|----|-----------------------|---------|-----------------|
| 20 | 海外自主研修 | | |
| | 「サバイバル(?) in バングラデシュ」 | 医学科第4学年 | 大 塚 美 那 子 |
| | 「アメリカでの一人暮らし」 | 医学科第4学年 | 矢 野 景 子 |
| | 「カナダでの自主研修」 | 医学科第4学年 | 山 本 小 百 合 |
| 26 | 滋賀医科大学奨学基金奨学生の決定 | | |
| 28 | ヨット部による追悼慰霊式 | | |
| | 「2010年 嶋岡さん追悼慰霊式」 | ヨット部主将 | 医学科第2学年 井 本 博 之 |
| 29 | 「里親 GP」県民公開講座を開催 | | |

保健管理センターだより

- 30 | 保健管理センターだより

インフォメーション

- | | |
|----|---|
| 32 | 平成 22 年度医学科第 2 年次後期学士編入学入学宣誓式並びに
平成 22 年度秋季大学院医学系研究科博士課程・修士課程入学宣誓式 |
| 35 | 平成 22 年度第 1 回学位授与式 |
| 36 | 第 36 回 滋賀医科大学解剖体慰霊式 |

編集後記 (宮松編集長)

トピックス

第36回「若鮎祭」を終えて

第36回若鮎祭実行委員会 委員長 医学科第4学年 石河 慎也

今、若鮎祭が終わって3日後です。最終日に少し降った雨のせいで濡れてしまった TENT を乾かす作業がようやく終わり、いつも通りに戻った中庭の風景を見ていると、とうとう若鮎祭が終わってしまったのだというどこか寂さを感じます。そして何より、今までに感じたことのない、とてつもなく大きな達成感に浸っています。こんなにも大きな達成感を味わえるのも、本当に大勢の方の支えがあったからだ、すべての人に感謝の気持ちでいっぱいです。

今からちょうど10カ月前、若鮎祭実行委員長を誰がするかという話があり、当時の体育会長から「おまえ、やらへん?」と言われました。今まで、組織のトップに立ち、まとめるなどといったことをしたことも、しようと思ったこともなかった僕でしたが、その時一つの考えがありました。一度しかない大学生活なのだから、何でもやってみよう、というものです。人がやらないことをしてみるのも面白いかも、なんて思っていました。そんなちょっとした考えのもと、第36回若鮎祭実行委員長を引き受けることになりました。

とはいうものの、今までは若鮎祭では部活の模擬店の店番しかしたことがない僕にとって、若鮎祭の運営は全くの一からのスタートでした。右も左も分からないまま、まず執行部を決め、次にステージ、企画、総務、広報、広告局の局長、副局長、局員を決めていきました。ここでやっとスタートラインに立



てたものの、まだ何も分かっていない僕がいました。分からないことがあれば前実行委員長に聞きまくり、これからどうしていいかと大まかなことを執行部で話しまくりました。この時に今回のテーマ「彩～shine your color～」が決まりました。ここで少し今回のテーマについて書こうと思います。

今回のテーマには「当日来て下さった方の生活に彩りをお与えできるよう学園祭にしよう!」、そして「学生一人ひとりが個性を発揮して、彩りのある学園祭を作っていこう!」という気持ちをこめました。そんなテーマのもと、今年は学生の思考を凝らした新しいステージ企画が多くなされ、ラジオ放送といった今までにはなかったことにも挑戦しました。

また実際に心音や呼吸音を来場者に聞いていただける医療体験コーナーや、地域の方たちに模擬





店、出し物をしていただくなど、地域に開かれた学園祭を作ってきました。学園祭が終わった今、このテーマにぴったりの学園祭を成功できたと確信しています。

なんだかんだで、5月頃にはいつの間にか軌道に乗り、各局とも順調に進んでいました。今だから言いますが、学園祭を成功してみせるぞと当初は闘志を燃やしていた僕も、この時期に中だるみをしてしまいました。そんな時、こんなではあかと僕に教えてくれたのはみんなの頑張りでした。局員がこんなに頑張っているのに、委員長は何してるんや、と今一度自分を叱りつけ、準備を進めていきました。

この10ヶ月間の準備の間、本当にたくさんの人と出会いました。寄付金を頂いた方、広告を出して下さった方、外部から模擬店を出店してくださった方、ステージ業者、また他の大学の実行委員。この出会いの中、人に助けられ、人の優しさを感じました。人の出会いっていいな、なんて心の底から思ったりもしました。

若鮎祭は他の大学の学園祭と大きく異なる点があります。他の大学では学園祭の実行委員会はサークル的な感じで学年もまちまちです。それに対し、若鮎祭では医学科4回生、看護学科2回生の全員実行委員です。毎年、実行委員が変わってしまうので、引き継ぎがうまくいかなかったりして、大変なこともあります。しかし、それぞれの学年の色が出ますし、そして何より普段一緒に勉強をしている仲間とより一層楽しい時間が過ごせる、というすばらし

い点もあります。そんな時間が今の僕の宝物です。

今改めて振り返ってみると、本当にいろいろなことがありました。頼りない僕のせいで、意見がまとまらないこともありました。このままでは学園祭が成り立たない!などと直前に本気で焦った時もありました。けれども、どんなに苦しいことも今となってはいい思い出と言えるような気がします。それも一緒に学園祭を作り上げた仲間たちのおかげです。何度言っても足りないのですが、一人ひとりにありがとうと伝えたいです。

最後となりましたが、馬場学長、服部副学長、柏木病院長をはじめ大学・病院の教職員の皆様、永田学生生活支援部門長をはじめ学生生活支援部門の先生方、湯浅課長をはじめ学生課の職員の皆様、湖医会をはじめOB・OGの皆様、後援会の父母の方々、協賛して下さった企業の皆様、若鮎祭に来場した下さった方々、若鮎祭に関わった全ての方々に深く感謝申し上げたいと思います。至らない点多々ありましたが、皆様のあたたかいご理解とご支援のおかげで無事第36回若鮎祭を終えることができました。本当にありがとうございました。

最後にもう一つだけ書かせて下さい。この若鮎祭の成功は学生課の栗本さんなしではあり得ませんでした。私たち学生のことをいつも考えてくださり、的確なアドバイス、ご指摘を頂き、助けていただきました。心より感謝いたします。本当にありがとうございました。



「若鮎祭」実行委員の感想

副委員長 医学科第4学年 新田 信人

今回の学祭は、近年の若鮎祭のうちでも、最も盛り上がったのではないかと思います。今年の学祭では、「彩」をテーマとして、各局の局員さんがアイデアを出し合い、すばらしい企画が沢山ありました。また、医療体験コーナーでは、一般の人々に、乳がん（人工乳房のサンプル）を実際に触ってもらったり、AEDの使用方法を学んでもらったりと、自身の健康について興味を抱いてもらえたと思います。そういう意味で、医科大学の特色を十分に生かしました。

学祭の1週間前から徹夜が続き、身体的にも、精神的にも限界が来ていましたが、フィナーレが終わった後、みんなで胸上げしていると、達成感と同時に、みんなの結束力を感じることができました。本当にいい若鮎祭だったと思います。

副委員長 医学科第4学年 小川 智也

第36回若鮎祭が終わりました。友達である医学科4年と、後輩の看護学科2年で作れる、最初で最後の学園祭。私は、副委員長を務めることができました。初めは副委員長なんてやりたくないと思っていました。肩書きのある役職なんて面倒くさいだけだと、そう思っていました。しかし、学祭を終えた今では、本当にやってよかったという充実感でいっぱいです。委員長石河を中心に、執行部として学祭を作っていたことは、非常に貴重な経験でしたし、何より楽しかった。私が何もできないときは、執行部はじめみんなが助けてくれました。この仲間と仕事ができて、本当によかった。

最後になりましたが、第36回若鮎祭に携わってくださったみなさん、本当にありがとうございました。

副委員長 医学科第4学年 橘 高 昭子

今年の初めに実行委員会が立ち上がってから約10ヶ月、長い準備期間でしたが終わってみるとあっという間でした。準備する人、楽しむ人、当日来場してくださる一般の方々、若鮎祭に関わる全ての人々の心や生活に「彩」を添えたい、その想いでこれまで頑張ってきました。医学科4年生、看護学科2年生、全ての実行委員の力が一つになって作り上げられた若鮎祭でした。私自身も10月に入ってから連日夜中の1時、2時まで大学に残って様々な準備に追われ、正直しんどいと思った時もありましたが、素晴らしい執行部のメンバーに恵まれ、このメンバーと一緒に仕事が出来たことはとても良い思い出です。

実行委員という立場に立ってみて初めて、若鮎祭が過去の先輩方の努力によって受け継がれてきて、毎年目に見えない沢山の人の頑張りによって成り立っているのだということを実感しました。後輩の皆さん、是非この素晴らしい伝統を繋いでいってください。

副委員長 看護学科第2学年 青木 渚

若鮎祭を無事に終えることができ、今とてもほっとしています。思い返すと副委員長になってから今までがあっという間でした。執行部の仕事が大変なこともありましたが、今年こうして学祭を作る側に回って初めて、来て下さる人を楽しませる為に多くの人が努力されていて、若鮎祭がそんな皆の協力の基に成り立っているのだということを感じることが出来ました。

一つのことを皆で作り上げるということは、本当に素晴らしいものです。皆で作り上げた若鮎祭が終わるフィナーレで感じたあの達成感を私は忘れることは出来ないと思います。執行部として若鮎祭に携わることができ、本当に貴重な体験が出来ました。本当にありがとうございました。





副委員長 看護学科第2学年 藤本 芽以

今年も盛大に開催できました。準備が思うように進まず苦労することも多かったですが、来場者の笑顔を見て実行委員をやってよかったと強く感じています。今年は彩（いろどり）がテーマということでフィナーレには色とりどりの花火とレーザーを使うなど例年以上に楽しんでいただけて本当によかったです。また自分も一緒に楽しみながら参加することができ、とても充実した2日間になりました。

来年は今年以上に盛大に開催されることを、そしてすべての人が笑顔で楽しめる空間作りをしていただけたらと思います。最後になりましたがご協力をいただいた先生方、スタッフの方々本当にありがとうございました。

執行部会計 医学科第4学年 神鳥 研二

本年度の若鮎祭、楽しんでいただけましたか？花火やレーザーを使用したフィナーレなどは多くの人の心に残ったことと思います。あのような企画が実現したのも広告局員や医学科4年生の努力の甲斐あって全体収入が増加したことに加えて、各局で節約の徹底をしていただいた結果です。最終の収支報告はまだ出ていませんが今年度の収入内で運営できる目途がついており、会計着任時から抱えていたプレッシャーから解放され、今は達成感と安堵感でいっぱいです。若鮎祭会計としての経験は間違いなく僕の



学生生活に“彩り”をそえてくれました。

来年の若鮎祭は今年を超えます！という頼もしい先輩の声も聞かれ、今から来年の若鮎祭を楽しみにしています。

ステージ局局長 医学科第4学年 徳山 尚斗

今年のステージはいかがでしたか？。テーマが「彩」ということもあり、これまでの若鮎祭とは違う、自分達の学年のカラーを出したステージを作りたいという想いで若鮎祭のステージを作りました。本学の学生が楽しめなければ盛り上がりたらないだろうという信念のもと、局員に時には鞭を、時には飴をあげ、みなさんが笑顔になれる企画を作ることができたと思います。ステージ企画を暖かい目で見てくださった観客のみなさんの笑顔にパワーをもらい、ステージ局一同も大いに楽しんだ若鮎祭でした。フィナーレでは会場のどこからともなく手拍子が沸き起こり、本当にホッとしたのを覚えています。本当にありがとうございました。

ステージ局副局長 看護学科第2学年 山本 安貴子

この若鮎祭を通じて私が感じたことは、まず、ステージにおいては、準備が大切なのはもちろんですが、観客の方々がどれだけ楽しめるかが一番大切だということです。全ての物事において言えることですが、自己中心的な考えではいけないということを学びました。

また、仲間がいることの大切さも学びました。局員が決まった当時は、本当にこのメンバーで大丈夫なのかと不安になったこともあります。しかし、このメンバーだったからこそ、お互いが支えあい、乗り切ることができ、今回の若鮎祭を成功させることができたのだと思います。

最後になりましたが、ステージに関わっていただいた出演者の方々、スタッフの方々、本当にありがとうございました！！



企画局局长 医学科第4学年 矢野 景子

今年の企画局は、アイデア豊富な人が多く、個性のかつ斬新な企画を数多く取り入れることができたと思います。その分、問題も色々でてしまい、私の力不足から局員に迷惑をかけたこともしばしばありました。しかし皆に助けられ、局長の仕事を無事やり遂げることができ、学祭でも成功を収めることができました。本当に感謝の気持ちでいっぱいです。

新しいことをするのは難しいですが、その分やりがいがあると思います。来年も型にはまらず、自由に、新しい企画をどんどん生み出してほしいです。

最後に、至らない点も多くありましたが、こんな私についてきて下さった局員の皆さん、本当にありがとうございました。

企画局副局長 看護学科第2学年 河村 真希

みなさん、若鮎祭お疲れ様でした。若鮎祭の準備期間には、企画の変更など予想外の事があつたりと、なかなか大変でした。だからこそ、若鮎祭最終日まで大きな問題もなく、無事に終わると嬉しさよりも安心感の方が大きかったです。

私が、この若鮎祭を通して感じたみなさんに伝えたい事は、自分に割り振られた仕事は責任をもって最後まで確実にこなす事、そして、友人にすすんで協力するという優しさを大切にしてほしいという事です。若



鮎祭を成功させることが出来たのは、みなさんの協力があったからこそだと思います。最高の学園祭の一部を作れたことに、また協力してくださった全ての人に感謝します。本当に、ありがとうございました！

広告局局长 医学科第4学年 井岡 笑子

第36回若鮎祭を無事に終えることができました。外部との交渉、お金のやりとりが必要な広告局の仕事は、とても気を使います。春から他のどの局よりも早く仕事を始めなければなりません。また裏方であるため、仕事内容も上級生からの引継ぎだけではなかなか把握できません。しかし、地道な努力の結果がしっかりと数値に表れるのも広告局です。不景気の中、今年は昨年度を上回る広告収入を得ることができました。力不足な局長にも関わらずしっかりと支えて下さった広告局員の皆様、広報局パンフ担当の方、そして執行部会計さんのおかげです。本当にありがとうございました。

広告局副局長 看護学科第2学年 森 西 順子

今回私はこの若鮎祭において広告局の副局長をやらせていただきました。最初にこの副局長をやらせていただくことになったときは、そこまで深くこの広告局というものの重要さを認識していませんでした。この広告局は「縁の下の力持ち」です。そして、こ





の広告局の頑張りが企画やステージに大きく影響します。たくさんの方の協力を得るために暑い中スーツを着て若鮎祭の趣旨を説明するために局員全員が頑張ってくれました。目立たない仕事こそ重要で、なくてはならないものであると感じることができました。副局長として何をしたら終わってみればよく分からないですが、この若鮎祭に携わることができて本当に良かったと思います。最高の経験です！

広報局局长 医学科第4学年 石村 奈々

第36回若鮎祭が大成功に終わり、心から嬉しく思います。局長とは名ばかりで、実際にはパンフ班・パーカー班・PR班の班長さんを筆頭に、局員さんが本当に頑張ってくれました。今年はテーマが「彩」ということで、パンフレットやパーカーを彩り豊かなものにしました。また外部PRにも取り組み、新たにバス車内広告にも挑戦してみました。半年以上かけて行われた若鮎祭の準備は、180人もの学生が学科・学年の壁を越えて協力し合わないと上手くいかなかったもので、想像以上に難しかったです。しかしその分、新たな出会い、新たな発見があり、とても充実したものとなりました。この仲間と一緒にできて本当に良かったです！ありがとうございました。

広報局副局長 看護学科第2学年 内山 真奈

若鮎祭がおわりました。私は広報局の中でもPR班の活動を補助していましたが、去年に広報活動をしていたところに断られるなど、決して円滑に行うことはできませんでした。しかし、班員のみんなが協力し、お昼休み・放課後・授業の合間を利用して少しずつ活動してくれたおかげで、駅前でのPR活動、各自治会へのビラ送付、各学校へのポスター配布などを行うことができました。あきらめずに、できることを一生懸命すれば、必ず成功するのだ、と実感しました。協力してくださった皆さんに本当に感謝します。

最後になりましたが、来年もぜひ変わらぬご支援よろしくお願いいたします。



総務局局长 医学科第4学年 土谷 彰

結構渋りつつも総務局長を引き受けた今年の2月から7ヶ月間、大した仕事もないと高をくって10月を迎えてしまうと、そこからは目の回るような忙しさでした。計画性がないにもほどがあります。なぜにこんないい加減な人間に、執行部会計、広告局長に次いできっちりしていないといけない役職が与えられたのか、いまだに不思議なのですが、なぜ大した失敗もなく総務局が回っていたのかははっきりしています。私を支えてくれていた局員たちがしっかりしてくれていたからです。一つの仕事をするにあたって仲間の力というもののがどれだけ重要かを思い知りました。素晴らしい仲間たちと、第36回若鮎祭を裏方として支えられた事を誇りに思います。

総務局副局長 看護学科第2学年 川瀬 満智子

若鮎祭お疲れ様でした。今回私は総務局の副局長を務めさせていただきました。皆さんのお力になれるような働きが出来たか甚だ疑問ですが…。総務局は学祭における縁の下での力持ち。細かい仕事が多いです。また学祭の前日・当日・翌日ともに忙しい役職でもあり、表に出るような役割ではないですが、そのぶん学祭にはなくてはならない存在です。このような、学祭を裏から支える素晴らしい仕事に関わることができたこと、非常にうれしく思っています。

最後に、今回無事に学祭を終えることができたのは、総務局の局長はじめ、班長、局員の方々の多大なご協力のおかげです。本当にありがとうございました。



平成22年度 学生表彰

10月23日(土)、第36回若鮎祭開会式終了後に中庭水上特設ステージで、滋賀医科大学学生表彰の表彰式を挙行了しました。

今回、表彰を受けられたのは、平成21年9月から平成22年8月までの間に優れた実績、評価を得た4つの個人及び団体です。受賞者には馬場学長から表彰状と副賞の目録が授与されました。

受賞者	受賞理由
男子バレーボール部	第62回西日本医科学生総合体育大会優勝
学習支援ボランティアサークル「アトラス」	大津市内の生活保護世帯の生徒への学習支援活動を続け、新規学習会の立上げに関わるなど社会的な活動を行った。
水泳部 高田 真央	第62回西日本医科学生総合体育大会 女子100m背泳ぎ優勝、女子200m個人メドレー優勝
医学科第6学年 稲田 悠	ミシガン大学での自主研修の成果を、日本医学教育学会の学会誌である「医学教育」に投稿し、「参加型臨床実習は医学生のモチベーションを高める」という論文で第41巻5号(平成22年10月初旬発行)に「報告」として掲載されることが確定した。



第62回 西日本医科学生総合体育大会

今年度の西日本医科学生総合体育大会（通称：西医体）は名古屋大学が主幹校として、8月上旬に開催されました。

今年度は優勝した種目は少ないものの全体的にベスト8以上の成績の種目が多く、コンスタントな結果を残すことができ、総合成績も第16位となりました。

第62回 西日本医科学生総合体育大会 本学参加種目の主な結果（ベスト8以上）		
クラブ名	成績	
バレーボール	(男子) 優勝	
ハンドボール	第3位	
バドミントン	(女子) 団体	ベスト8
	(女子) 個人戦ダブルス	ベスト8 (奥田・舟山ペア)
水泳	(男子) 800m 自由形	個人 2位 (4年：松田 悠司)
	(男子) 400m 自由形	個人 5位 (4年：松田 悠司)
	(男子) 200m 個人メドレー	個人 5位 (1年：山本 大雅)
	(男子) 100m バタフライ	個人 7位 (1年：山本 大雅)
	(女子) 200m 個人メドレー	個人 優勝 (4年：高田 真央)
	(女子) 100m 背泳ぎ	個人 優勝 (4年：高田 真央)
	800m リレー	5位
ボート	総合 第3位	
	一般男子シングルスカル	2位、3位、5位
	一般男子ダブルスカル	2位、5位
	一般男子舵手付きフォア	6位
	* ボート競技メディカル部門(メディカルレガッタ)	
	一般女子舵手付きクオドリプル	5位、7位
陸上競技	(男子) 三段跳	8位 (6年：森田 康大)
	(男子) 400m	5位 (4年：木村浩一朗)
	(男子) 110m ハードル	8位 (2年：入山 圭司)
	(男子) 400m ハードル	4位 (2年：入山 圭司)
	(男子) 3000m障害	7位 (1年：脇坂 穂高)
	(男子) 砲丸投	4位 (1年：林谷 俊和)
	(男子) 4 × 100m リレー	8位 (森田・大槻・岡本・木村)
	(男子) 4 × 400m リレー	5位 (岡本・大石・入山・木村)
	(女子) 走幅跳	8位 (5年：南 志乃)
	(女子) 円盤投	8位 (5年：南 志乃)
	(女子) やり投	3位 (3年：堺 淑恵)

西医体評議委員を終えて

西医体評議委員 医学科 第4学年 石村 奈々

この一年間、体育会の役職の一つである西医体評議委員を務めてきました。この仕事は、年4回開催される西医体の評議会に出席し、他大学の評議委員と共に西医体の予算や日程の検討、議決を行ったり、あるいは評議会を受けて体育会のメンバー（各部活キャプテン）にエントリー方法を説明したり、説明文章を配布するというものでした。

今年は、インターネット上でエントリーが出来るようになった事もあり、仕事はそれ程大変ではありませんでしたが、キャプテン全員に漏れなく連絡事項を伝え、期限を守ってもらうのには少し苦労しました。西医体は44の大学が参加して行われるとても大きな大会で、期限遅れに対する対応が厳しいのですが、その一方で、多くの部にとって一年間の集大成となる大切な大会でもあるので、どこかでミスをしていないかと心配になる事もよくありました。幸い、体育会のメンバー、学生課の方々の協力を得ることができ、無事役目を終えることができました。みなさん、本当にありがとうございました。

評議会では、他大学の学生と交流ができ、西医体が主管大学の多大なる苦労のもと運営されているのだと知ることができました。また、評議委員として運営に携わったことによって、この第62



回西医体に対する思い入れは人一倍となりました。このような貴重な経験ができて、本当に良かったです!!

西医体は自分達だけの結果に目が行きがちですが、それぞれの部が少しずつ強くなれば、総合優勝も夢ではありません。いつの年か、滋賀医科大学が総合優勝することを楽しみにしています!

(皆で栗本さんの夢を叶えましょう!!)

1年間、ありがとうございました。



左端が筆者

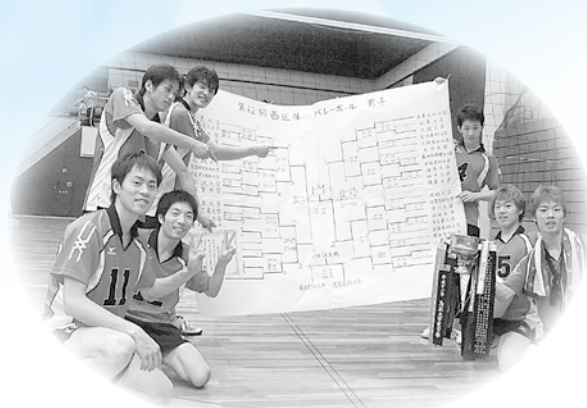
悲願の初優勝

男子バレーボール部主将 医学科 第4学年 新 田 信 人

西医体優勝が決定した瞬間、何が起こったのか最初は分からなかった。しかし、言葉では表現することの出来ない喜びが心の底から湧き上がってくるのを感じた。共に戦ってきた部員やマネージャーの涙、応援団の歓声を聞いて、「優勝するってこういうことなのか」と実感できた。

僕たちのチームはほぼ同じメンバーで3年間戦ってきた。しかし、過去2年とも、西医体以外の大会では優勝などの成績を残したが、肝心の西医体では、2日目にすら進めないという散々たる結果だった。今年は、セッターの米岡さんと、エースの石垣さんが最後の年ということもあり、今年こそはという思いがいっそう強かった。

常に苦勞してきたのはメンバーの確保である。3年間、部員が8人を超えたことは無かった。6人で試合に出場した期間もあった。メンバーが少



ない分、個人の練習量は他大学に比べて多いが、チーム練習が常にできないので、毎週日曜日に練習試合をする必要があった。週3回の通常練に加え、週2回の朝練、月3回の練習試合と、今振り返ってみると、バレーに費やした時間は膨大であった。しかし、その莫大な練習量が自信につながり、優勝を果たしたことができたと思う。

技術的にも精神的にも未熟な主将のために、チームのみんなには苦勞をかけた。みんなのフォローがあったからこそ、優勝を果たすことができた。みんなに感謝したい。

最後になりましたが、平素からご支援いただいております、顧問の浅井教授をはじめ、OB・OGの方々に、深く御礼申し上げます。



史上最強の夏

水泳部 医学科 第4学年 高田 真央

無我夢中で泳ぎ切り、電光掲示板を確認し、そこから滋賀医大の観客席を見渡す気分は今まで体験したことのないくらい最高の気分だった。私の念願であった金メダルをついに、、、やっと、、、手にした瞬間のことである。

今まで3度の西医体を経験し、西医体の頂点に立つことがいかに難しいか痛感させられた。入学してから私の西医体での最高順位は4位→3位→2位→1位と一歩ずつ少しずつの進歩だった。毎年、悔しさを胸に刻み練習を重ねてきた。

優勝した時に1番嬉しかったことはたくさんの人に声をかけてもらったこと。もちろん滋賀医大の水泳部員のみんなもだし、たくさんのOBさんやOGさん、そして一緒に頑張ってきた他大学の水泳部員の人達。たくさんの人に支えられていると改めて実感した。

ここに辿り着くまでの道のりはたいへんであったが本当にたくさんの人に支えられました。今年は本当によく泳いだ、それを可能にするためにプールを貸してくださった富士見プールの方々、企画した練習に参加してくれたみんな、サポートしてくれたマネさん、練習に誘ってくれた他大学の人達など感謝したい人は数え出したらキリがない。

水泳において自己ベストは大きな目標である。自己ベストを出すのはたいへんだが、そこに思いがこもっていればこもっている分、喜びは半端で



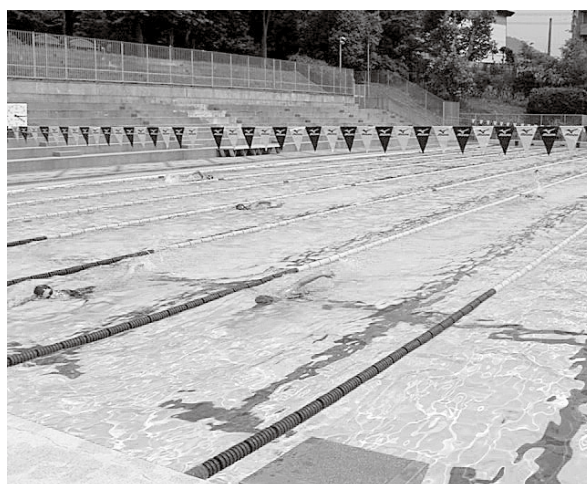
表彰式にて

ない。水泳は自分との闘いであると思ってしまう。自分に負けないことは最も難しい。練習でも容易に手を抜くことが可能だ。しかし、まわりに頑張っている人がいるから自分も頑張らなければと感じる。水泳はただの個人競技では決してないと私は思う。この1年つらい練習も心折れそうな時も決して1人では乗り越えることが出来なかった。落ち込んだりくじけそうな時、水泳部には励ましたり支えてくれる仲間がたくさんいる。普段の何気ない言葉にも何度も救われた。たくさんの人に支えられ獲得出来た自己ベストと優勝でした。

この場をお借りして私や水泳部を支えていただいた全ての方々に、、、本当にありがとうございました!!



西医体お疲れ様でした!!



合宿風景

新任教員紹介

内科学講座(糖尿病内分泌)



准教授
西尾善彦

平成 22 年 6 月 1 日付けで内科学講座糖尿病・腎臓・神経内科(旧第三内科)の准教授に就任いたしました。簡単に自己紹介いたしますと、1960 年に滋賀県の信楽町に生まれています。地元の小中学校、膳所高校をへて滋賀医科大学を 5 期生として卒業しています。第 3 内科(繁田幸男教授)に入局し、大学院では柏木厚典現病院長の薫陶を受け博士号をいただいています。その後、米国への留学の 2 年間を含め 6 年ほど学外で働きましたが、それ以外は学生時代を含めると 25 年間滋賀医科大学でお世話になっています。専門領域は糖尿病、内分泌代謝学で研究面では大学院以来ずっと糖尿病の心血管合併症をテーマにしてきました。

振り返ってみると、私の学生の頃はまだのんびりとした時代で、あまり勉強しなくても特定の科

を除けば、お情けで進級させてもらえ、私自身も一生懸命やった記憶があるのはへたの横好きの野球ぐらいで、将来、大学で研究を行うとか教育職につくとか、ましてやスーパー Dr. になってやろうとか留学して一旗揚げてやろうなどとは夢想だにせず、のんびりと easy に過ごしていたと記憶しています。状況が激変したのは入局してからで、当然、学生時代に不勉強であった付けは払わねばなりませんでした。卒業後はそれなりに努力した記憶があります。また、当時一年先輩には金沢医科大学教授の古家先生、国立循環器病センターで室長をされている斯波先生、同級生には富山医科薬科大学教授の笹岡先生、自治医大出身で現在弓削診療所の院長をしている雨森先生、一年下に聖マリアンナ医科大学教授の田中先生と今から思えばそうそうたる先生と一緒に研修していました。みんな個性豊かで ambitious だったと思いますし、私自身相当刺激と影響を受けたと思います。

准教授就任にあたって、現在の教室を眺めみると、臨床のレベルでも研究のレベルでも当時の水準をはるかに上回っていると思います。患者さんの数も増え、同門の医師の数も増えずいぶん発展したように感じます。ただ当時の熱い、ambition に満ちた雰囲気はどうでしょうか。自分自身を鼓舞することはもちろん教室のみんなのやる気を鼓舞できれば、熱い雰囲気を盛り上げられればいいなと思っています。

Everybody, be ambitious!

経歴

1985 年 滋賀医科大学 医学部 卒業
1989 年 同大学院修了(医学博士)
1989 年 市立柏原病院 内科勤務
1991 年 琵琶湖大橋病院 内科勤務
1992 年 米国ハーバード大学医学部附属
ジョスリン糖尿病研究所 血管生物学部門
(GL King 教授) 研究員

1994 年 滋賀医科大学 第三内科 医員
1995 年 同 救急部 医員
1995 年 同 第三内科 助手
2006 年 同 内分泌代謝内科 講師
2010 年 糖尿病内分泌内科に名称変更
同 准教授

脳神経外科学講座



准教授
中澤 拓也

本年6月1日付けで脳神経外科学講座の准教授を拝命致しました。和歌山県出身で、京都で大学浪人をし、滋賀医科大学に入学致しました。当時の瀬田はほとんど何もなく、最近の変わりようは隔世の感があります。大学時代は、クラブや遊びに時間を費やしたおかげで、当時2回あった医師国家試験の秋組になってしまいましたが、卒業時から決めていました脳神経外科(当時は半田教授、松田助教授)に入局し、厳しく臨床の基礎を教えてくださいいただきました。その後、大阪府済生会野江病院で、脳血管内治療の基礎となるカテーテルを使用しての脳血管撮影の手ほどきを受けました。

滋賀医大に戻り、臨床と平行して、くも膜下出血後脳血管攣縮の形態学的研究を行いました。

なかなか結果が出せず、当時の解剖学前田教授や病理学狭間教授に非常にお世話になりました。

この頃から、髄膜腫の塞栓や悪性腫瘍の化学療法剤局所動注等の血管内治療を始めましたが、その頃のカテーテルでは眼動脈の遠位にでも誘導するのが困難で、手技には時間を要しました。1990年頃からマイクロカテーテルの開発とともに、脳動脈瘤や脳動静脈奇形の塞栓も始めましたが、開頭手術が困難な重症の患者さんが多く、時には合併症も起こり、つらい思いもしました。ガイドワイヤー、カテーテルの改良とコイル、ステントの出現で、最近の血管内治療は顕微鏡手術を上回る勢いで、さらに次々と新しい機材が使用可能となってきています。

1999年の終わりから約9年間あまりは、第二岡本総合病院、大津赤十字病院と部長をさせていただき、開頭手術と血管内手術の両方を実践する機会に恵まれ、治療適応に柔軟な考え方ができるようになったと思っています。

脳血管内治療では、指導医が50人に満たない2001年から資格を頂きました。近年は合格率が60%を切るほどの脳血管内治療専門医ですが、幸い、我々の教室では既に9人の専門医を輩出しております。さらに指導医の育成と地域において高いレベルの医療を維持できるように研鑽して行く所存です。今後ともぜひよろしくお願い申し上げます。

経歴

1982年 3月 滋賀医科大学 医学部医学科卒業
1982年12月 滋賀医科大学医学部附属病院
脳神経外科医員(研修医)
1983年 3月 滋賀医科大学 脳神経外科助手
1983年10月 大阪府済生会野江病院 医員
1985年 4月 滋賀医科大学 脳神経外科助手
1999年11月 第二岡本総合病院 脳神経外科部長

2005年 4月 大津赤十字病院 第二脳神経外科部長
2008年12月 滋賀医科大学 脳神経外科講師
2010年 6月 滋賀医科大学 脳神経外科准教授

家庭医療学講座



准教授

田村 祐 樹

2010年7月1日付で、家庭医療学講座・総合診療部の准教授に着任いたしました。

私は滋賀医科大学医学部8期生です。在学中は端艇部に所属し、琵琶湖・瀬田川にて練習に明け暮れた結果、西医体、全医体においてシェルフォ部門で優勝し、関西漕艇選手権第3位、インカレでは準決勝に進出いたしました。この経験は私の人生に大きな影響を与えてくれました。また、この貴重な経験は、大学からの暖かい見守りと援助、ボートを愛する諸先輩方と仲間達、顧問をしてくださった小玉正智教授(当時の外科学第一講座)、そして毎朝モーターボートに乗ってコーチ・監督をしてくださった故西村暁一先生(西村外科医院・院長)のおかげだと思います。

私は昭和63年に本学を卒業しましたが、上記の経験から本学にて研修する事に迷うことがありませんでした。当時の外科学第一講座小玉正智教授のもとで、医師人生をスタート致しました。私の外科人生にとって、上記教授、安川林良先生(当時・松下記念病院外科部長)、渡辺寛、加藤抱一、両先生(当時・がんセンター中央病院・食道外科)、細川正夫先生(当時・恵佑会札幌病院・院長)など多くの方々から、直接ご指導を賜った事は本当にありがたいことでした。

研究面では、本学の病理学第一講座にて、服部隆則現副学長、杉原洋行教授(現病理学講座 分子診断病理学部門)にご指導いただき、食道がんのクローン性解析を行い、本学にて学位(医学博士)を賜りました。

さてその後、縁あって外科を辞し、メディカルコーディネーションセンター(MCC)総合診療部助手となりました。このきっかけを作ったのが、現在、私が所属する講座の三ッ浪健一教授です。この方向転換は私が緩和ケアの道に進む大きなきっかけとなり、また私のライフワークが、がん患者さんと家族への全人的サポートであるとの気付きを与えてくれました。

2003年以降、大学を離れ、長らく緩和ケアの領域で仕事をしていました。赤松信院長の人柄に惹かれて、彦根市立病院緩和ケア科に勤務したのは絶妙な選択だったと思います。伸び伸びといろいろなことを学ぶことができました。さらに緩和ケアを行っていく中で、サイモントン療法に出会った事は衝撃でした。がん患者とその家族を癒す「ヒーリングプログラム」であるこの療法は、故カールサイモントン博士によって開発されたものです。心のケアを提供する質を高めてくれるだけでなく、ケアを提供する我々自身のケアに大変役立つ内容がふんだんにこの療法には含まれています。私はサイモントン療法認定スーパーバイザーですが、この療法のエッセンスは仕事や人生において私自身の土台を構築するのに欠かせないものになっています。真の癒しを気付かせてくれました。私が現在、年間50本を越える講演やセミナーをしています、その柱となっています。

もう一つの顔は、行動心理学という分野であるPCM®(プロセスコミュニケーションモデル)の認定トレーナーでもあります。コミュニケーションとストレスが表裏一体であることに気付かれている方もいらっしゃると思います。この分野で、深く、且つ、実践的な理論を形作ったのが、行動心理学者のテービ・ケーラー博士です。もし、日常や仕事上でコミュニケーションスキルやストレスケアにお悩みの方がいらっしゃいましたら、お声かけ下さい。何かお役に立つかもしれません。

最後になりましたが、これまでに大恩人とも言える数々の先生方に出会えたこと、この場をお借りして心から御礼申し上げます。また今回、再び本学の一員に迎えていただきましたことに厚く御礼申し上げます。緩和ケアを軸とした院内、地域、他職種の連携と教育にホスピスマインドを提供できましたら幸いに存じます。微力ですが、皆様方のご指導ご鞭撻を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

経歴

1988年 6月 滋賀医科大学 医学部附属病院研修医(第一外科)
1989年 4月 松下記念病院 外科研修医
1990年 4月 滋賀医科大学 医学部附属病院研修医
1990年 6月 滋賀医科大学 医学部(外科学第一講座) 研究生
1990年10月 滋賀医科大学 医学部附属病院医員(救急部)
1991年 6月 国立がんセンター 外科レジデント(食道外科)
1994年 6月 国立がんセンター 食道外科 任意研修医

1994年12月 滋賀医科大学 医学部附属病院医員(第一外科)
1995年 4月 滋賀医科大学大学院医学系研究科入学、
および単位取得退学(～1999年3月)
1999年 4月 滋賀医科大学 医学部附属病院医員(第一外科)
2000年 5月 滋賀医科大学 医学部附属病院総合診療部助手
2004年 1月 彦根市立病院 緩和ケア科 嘱託医
2010年 7月 滋賀医科大学 家庭医療学講座・総合診療部 准教授

地域生活看護学講座



講 師
藤 井 広 美

本年7月1日付で、看護学科地域生活看護学講座に着任いたしました。私は神戸生まれの根っからの関西人。平成19年から約3年間の東京生活から関西の地に戻り、琵琶湖と豊かな自然に癒され、ホッと一息ついているこの頃です。

さて、私の看護への歩みは30歳から始まります。入社して間もなくバブル経済が始まり、その終焉までをシステムエンジニアとして激務の中で過ごしました。「24時間働けますか」という某ドリンク剤CMのキャッチコピーさながらの毎日に、ふと周りを見るとうつや体調不良による長期休養者、先週まで元気だった課長の突然死…。将来への漠然とした不安と葛藤を覚え、30歳という転機にこのままの労働環境ではいけないという思いで看護の扉を叩くことになります。そして保

健師になって10余年が過ぎました。今も労働者の健康を取り巻く環境はほとんど変わっていません。私は残念ながら産業保健に携われませんでした。が、地域の保健師としての実践や大学教育、職能団体の活動など、未熟ながらも様々な経験を積む機会に恵まれました。近年、社会情勢の変化とともに地域における健康課題は複雑化の一途をたどり、保健師が取り扱う事例も多様かつ困難なものが急増しています。さらに新型インフルエンザ対策を始めとした健康危機管理や自殺、虐待問題、生活習慣病対策における厳しいアウトカムの要求等々、現場の保健師はその実践力の真価が問われる状況に直面しています。一方、昨年度教育年限の延長を含めた保健師助産師看護師法の改正が施行され、保健師教育も今変革の時期を迎えています。

地域の全ての人々を対象とし、人々の主体的な健康課題解決への取り組みを支援するのが保健師の役割とよく言われます。しかし、現実には必ずしも容易なものではありません。厳しい現実に直面できる強さと常に学び続ける姿勢を基盤とし、知識と技術に裏打ちされた地域看護を展開する能力が今求められています。現場の皆様の力もお借りしながら、よりよい教育が実現できればと考えています。

教員としても研究者としてもまだまだ未熟な私ですが、皆様のご指導ご鞭撻を賜りますよう、よろしくお願いいたします。

経 歴

1986年 3月 甲南大学 理学部応用化学科卒業

1986年 4月～1994年 3月

システムエンジニアとして勤務。退職後、看護の道へ

1997年 3月 神戸大学 医療技術短期大学部看護学科卒業

1998年 3月 兵庫県立総合衛生学院 保健学科保健科卒業

1998年 4月 財団法人兵庫県健康財団等で保健師として勤務

2001年 4月 兵庫県立看護大学(現 兵庫県立大学看護学部)助手

2005年 3月 武庫川女子大学大学院 臨床教育学研究科修士課程

臨床教育学専攻 修了

2006年 4月 園田学園女子大学

人間健康学部人間看護学科 講師

2007年 4月 社団法人日本看護協会事業開発部

(2008年～チーフマネージャー)

神戸大学大学院 医学系研究科保健学専攻

(看護学領域) 博士後期課程 在学中

2010年 7月 滋賀医科大学 地域生活看護学講座講師

社会医学講座(公衆衛生学部門)



准教授
大久保 孝義

2010年8月1付けで社会医学講座(公衆衛生学部門)の准教授を拝命しました。本学には2010年4月より同部門の特任准教授として勤務させていただいておりましたが、更に質の高い教育・研究に貢献すべく、努力していきたいと考えております。

私が公衆衛生学・予防医学の道に入るきっかけとなったのは、多くの患者が、脳心血管疾患のリスクファクターのコントロール・治療が不十分であるが故に重篤な合併症を起こし救命センターに運び込まれることを、臨床研修医時代に目の当たりにしたことでした。その後、様々なご縁に導かれ、東北大学大学院に入学し、岩手県で実施されている24時間血圧および家庭血圧に基づくコホート研究である「大迫(おおはさま)研究」のデータを用いて、血圧変動を考慮した高血圧・脳心血管疾患の診断・予防・治療に関する多くの分析を行って参りました。また様々な生活習慣病領域の研究や、がん登録事業への参加を通じ、多様な疫学研究・調査方法について、その道の専門家の先生方から直接、実際に、また幅広く学ぶことができたことは現在の大きな糧となっております。

博士課程修了後、George Institute for International Health(Sydney, Australia)において循環器疾患の大規模臨床試験・メタアナリシスについて勉強させていただきました。特

に、降圧療法の脳卒中再発予防効果を初めて明らかにした臨床試験 PROGRESS の分析に携わることができたのは得がたい経験でした。また、アジア・オセアニア地区の循環器コホートのメタアナリシス APCSC や、降圧薬臨床試験のメタアナリシス BPLTTC についても多くを学ぶことができました。帰国後、東北大学国際保健学分野で、医療の質に関わる分野を中心に国際保健学の一端に触れた後、薬学研究科に移動し、特に高血圧を中心とした、薬物治療に関する臨床研究・薬剤疫学研究にかかわって参りました。

上記を通じて一貫して疫学を研究の中心にしておりますが、教育等を通じ、様々な場面で疫学の重要性を実感しております。人に適応するエビデンスを作るには、健康人を対象とした疾病の自然経過を観察する狭義の観察疫学研究にも、薬物の効果を検証する臨床試験・治験にも、臨床・非臨床にかかわらず、疫学に関する知識と理解が必須です。また、長期にわたり追跡を行う研究は、疫学研究にせよ、臨床試験にせよ、イベントの数が増すほどより信頼性のある結果が得られます。すなわち、不幸な転帰を辿る人々が増すほどに研究としての信頼性が増します。いわば追跡研究は人の不幸によって成り立つ学問と言えるかもしれません。しかしそれゆえにその成果の社会還元が必要です。その手段の一つが論文発表であり、すぐれた論文はよりよい疾患の予防・治療に直接的に反映され得ます。

滋賀医科大学公衆衛生部門では、これまで上島弘嗣前教授を中心に、様々な循環器疾患・生活習慣病に関する疫学研究が行われ、日本・アジアにおける疫学研究の拠点として、確固たる地位を築いています。また三浦克之教授のもと、そのますますの発展が期待されています。これまで本学に蓄積された様々なデータへの関わりを通じて、エビデンス構築・論文化のプロセス・問題点を体感することにより、人間を対象とした研究の実施における問題発見・解決能力を持ち、かつ研究結果を数字のみではなく生身のデータとして感じ取れるような、研究能力・倫理観・責任感を有する人材を、育てることに貢献していければと考えています。どうぞよろしくお願い申し上げます。

経歴

1993年 3月 東北大学 医学部卒業
1993年 5月 山形県立中央病院 研修医
1999年 3月 東北大学大学院 医学系研究科博士課程(社会医学)修了
1999年 4月 日本学術振興会特別研究員(PD)
Institute for International Health (Sydney, Australia)
および 東北大学大学院 医学系研究科社会医学講座公衆衛生学分野に所属
2002年 4月 東北大学大学院 医学系研究科社会医学講座国際保健学分野 助手

2003年 4月 東北大学大学院 薬学研究科医薬開発構想寄附講座 講師
2004年10月 東北大学大学院 薬学研究科 COE フェロー・客員助教授
2005年 4月 東北大学大学院 薬学研究科医薬開発構想寄附講座 助教授
2007年 4月 東北大学大学院 薬学研究科医薬開発構想寄附講座 准教授
2010年 4月 滋賀医科大学 社会医学講座公衆衛生学部門 特任准教授
2010年 8月 滋賀医科大学 社会医学講座公衆衛生学部門 准教授

医療安全管理部



准教授
手塚 則 明

2010年10月1日付けで医療安全管理部副部長、准教授に就任いたしました。滋賀医科大学附属病院は臨床実習、初期医学・看護研修を受け持つ教育機関です。また、滋賀県唯一の大学病院として最先端の医療を提供できる地域医療の最前線でもあります。医学部附属病院として、役割の二面性に見合った安全管理が必要だと考えています。

1. 教育機関としての安全管理

ヒヤリハット報告、事故報告に基づくセーフティーネットの構築が必要です。患者さんに直接触れる技術は経験によって上達していきます。教育機関であれば当然経験の浅い医療者が多く、経験不足に基づく医療事故が多くなります。経験の浅い者が安心して医療を行うためには、システム

化された安全管理が必要です。ネームバンドの導入、タイムアウトの導入など新しい制度が着実に根付いてきています。今後は電子カルテの活用による安全システムの構築が急務です。滋賀医大で研修したことで、安全に対する考え方が浸透するような医療安全教育も充実したいと思います。

2. 地域医療の最前線としての安全管理

システム化された安全管理は最低限の安全を確保する方策であり、高度な医療に対する個別の対応は困難です。大学病院である以上、最先端の医療を開発し、提供する事は大きな役割です。新しい医療には未知のリスクが存在し、全てのリスクを予想することは困難です。そのリスクを適正に評価し、治療の結果までを管理することが大切だと思います。消極的な安全管理から一歩踏み込んで、治療成績まで含む形での安全管理、医療の質の確保を考えていきたいと思っています。医療安全を考える事で、滋賀医大の医療の質が向上することが目標です。

医療安全管理は非常にやりがいのある仕事であると感じています。滋賀医大を卒業し、滋賀医大で研修し、滋賀医大で臨床経験を積んできた者として、滋賀医大の為に仕事ができることは非常に喜びであります。臨床経験を基に現場に駆けつける事が出来る、フットワークの良い医療安全管理部を目指したいと思います。

経歴

1988年 3 月	滋賀医科大学	医学部医学科卒業	1999年 7 月	大津赤十字病院	呼吸器科部
1988年 6 月	滋賀医科大学	医学部附属病院医員(研修医)	2001年 1 月	滋賀医科大学	医学部附属病院第2外科医員
1989年 5 月	長原病院	外科	2002年 4 月	滋賀医科大学	外科学第二講座助手
1990年 4 月	愛知県がんセンター	胸部乳腺外科	2005年10月	滋賀医科大学	講師(学内)
1992年 4 月	愛知県がんセンター	研究所	2007年 4 月	滋賀医科大学	呼吸器外科診療科長
1994年 4 月	滋賀医科大学	医学部附属病院第2外科医員	2008年 3 月	滋賀医科大学	呼吸器外科講師
1998年 1 月	滋賀医科大学	外科学第二講座助手	2010年10月	滋賀医科大学	医療安全管理部准教授

利用できる電子ジャーナルが大幅に増えました！

Medical Online を導入しました！

❁「メディカルオンライン Medical Online」とは？

「メディカルオンライン Medical Online」は、インターネット医学関連文献検索サービスです。日本国内の学会・出版社で刊行された医学関連のジャーナルを収録し、目次情報からアブストラクト、本文（フルテキスト）までをPDFで提供します。

2010年5月15日(月)～6月30日(水)までトライアルを行った結果、たくさんの方から好評をいただき、正式に導入しました。



❁どんなタイトルが収録されている？

「産科と婦人科」、「産婦人科治療」、「消化器外科ナーシング」、「病理と臨床」、「実験医学」、「母性衛生」、「ナーシングトゥディ」など多数収録されており、現在の収録タイトルは、なんと 799 タイトル！
(2010.9.8 現在)

*タイトルリストは Medical Online の HP より「配信学会・出版社一覧」をご覧ください。

附属図書館 HP ([URL : http://www.shiga-med.ac.jp/library/](http://www.shiga-med.ac.jp/library/)) にリンクあり

電子ジャーナル・電子ブック

- フルテキストの読めるオンラインジャーナル
- その他のオンラインジャーナル/雑誌投稿機能など
- 電子ブック
- 近畿医科大学看護学ジャーナル
- 近畿医大雑誌
- 「ひわろ」: (近畿医科大学機関)ポスター
- Journal Citation Reports (JCR)
- 雑誌のインパクトファクターが調べられます
- EndNote Web
- Medical Online Library

医学論文をダウンロード 医療の総合ウェブサイト
Medical Online Library

キーワード検索 バックナンバー 分類別 配信学会・出版社一覧

Medical Online Library

配信学会・出版社一覧

学会名	学名	学名	学名
AKJH-SAKJH DENTAL SCIENCE	1980-1994	1995-2007	1991-2008
愛知歯科大学歯学会	愛知歯科大学歯学会	愛知歯科大学歯学会	愛知歯科大学歯学会
愛知歯科大学歯学会	愛知歯科大学歯学会	愛知歯科大学歯学会	愛知歯科大学歯学会

今まで電子ジャーナルがなかったから…と取り寄せを依頼していた雑誌掲載の論文も利用できるかもしれません！

❁ どうやってつかう？

基本的に面倒な手続きは必要ありません。OPAC の雑誌検索結果から、または医中誌 web・CiNii などの論文検索結果から、くるくるリンカーを通してアクセスできます。

Medical Online の HP で直接検索して、「配信学会・出版社一覧」で学会誌タイトルから巻号をたどって論文にアクセスすることもできます。

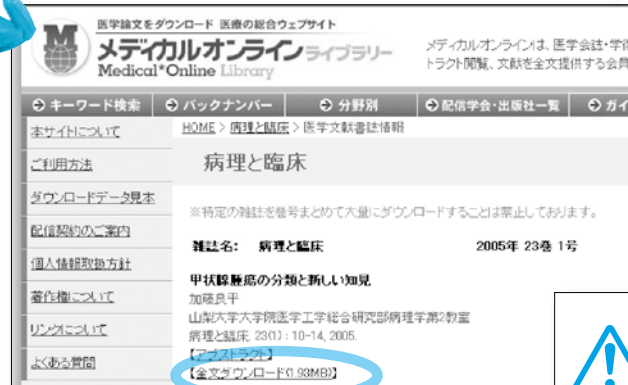
* 附属図書館 HP の「フルテキストの読めるオンラインジャーナル」にもタイトルを追加しています。

* 学外からもVPNサービスによる利用が可能です。

くるくるリンカー
を通して



Medical Online の
ホームページで

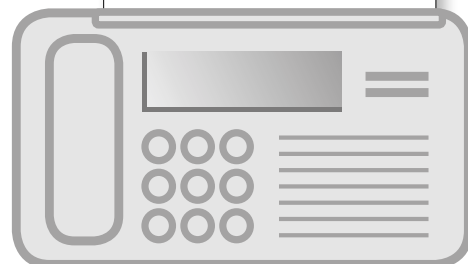


【全文のダウンロード】
の表示がなく、
【全文FAX送信】
となっている場合は、

FAXでの入手のみ可能です。
ご自宅、または研究室の番号を指
定してください。

STOP

機械的な大量ダウンロード、
特定の雑誌をまとめて大量
にダウンロード（手動でも駄
目！）などはしないでくださ
い。利用停止となり、多くの
方に迷惑がかかります！



キャンパスライフ

海外自主研修

サバイバル(?) in バングラデシュ

医学科第4学年 大塚 美那子

眼下に広がる沼地を見ながら、機中私の胸は一抹以上の不安でいっぱいだった。

自主研修先にバングラデシュを選択したのは、幼少時よりアフリカや中近東で暮らした経験が大きな要因になっている。国際関係の仕事に関心があり、今まで青年海外協力隊の隊員として西アフリカで活動をした経験がある。

バングラデシュ WHO が研修先とあり応募したが、蓋を開けてみれば WHO での仕事は終了しており循環器の研究施設兼病院が研修先となっていた。せっかく途上国で研修をするので「そこでしか出来ないことを」と、一昨年に出生し母子保健に興味があったので、受け

入れ先の先生の知り合いの先生の元で母子保健に関して研修する事に決まった。こうした経緯で、紹介してもらった母子病院・研究機関、CWCH (Centre for Woman and Child Health) の先生と連絡をとっていたのだが、渡航直前2日前に「海外出張に出かけるので、あとは病院スタッフに託す。」というメールがあり、連絡を取り合っていた内容がCWCHのスタッフに伝えられているか分からぬまま、最低限の事項を関係者にメールし日本を後にしたのであった。

バングラデシュは世界一の人口密度（小さい島国国家などは除く）というだけあり、どこもかしこも人であふれていた。首都ダッカの空港から出たところの雑踏ぶり、におい、肌にまとわりつく空気などは今まで行った国々に似ているようで、懐かしい感じもした。イスラム教のお祈りの時間を告げるアザーンのしらべも、各地微妙に違うが、なじみのものであった。



今まで見た事がなかったものは、沼の多さである。バングラデシュはガンジス川などの下流のデルタ地帯であり、雨季にはどこもかしこも沼だらけである。町の中でも車道脇に水が溜まり、そこにごみが放置され、きれいとは思えない状態だった。

食事はカレー味が多く、果物は季節により変わり豊富であった。イスラム教徒は豚を食べないので豚肉はなかったが、牛肉や鶏肉は食べる。日本食が恋しくなる人には辛いかもしれないが、私はとても美味しくおなかも壊さず過ごすことが出来た。

滞在期間中半分はラマダン（断食月）で、日中食料を購入できないのではないかと危惧したが、バングラデシュは比較的自由な国らしく、外に布を張り巡らせた飲食店内では食事が出来るようになっていたのには少し驚いた。後、断水はないが、停電はしょっちゅうである。

バングラデシュ到着早々、ゲストハウスの人に付き添ってもらい、携帯電話とインターネットモ





デムを買い、受け入れ先 CWCH に次の日に行く旨を告げた。

翌日、ゲストハウスから大分離れた CWCH まで一人、場所を知らぬタクシーに乗りながら、沼の中の橋を渡り、いったい私は迎え入れられるのだろうかと心配していたのだが、病院に着いたとたんその不安は吹き飛んだ。CWCH の玄関で定年を越した看護師長兼病院取りまとめのマーガレットが素朴だけど可愛い花束を持って迎えてくれたのであった。

それからの 3 週間は 1 日の観光休日をとった以外、研究課題の母乳育児の調査の為、複数の機関・病院などへ飛び込み取材を行った。これはバングラデシュへ到着した 8 月第一週が母乳育児週間であり、イベントやセミナーで様々な機関の人から名刺を貰えたから出来た事である。貰った名刺の電話番号に片っ端から電話をかけ面会を取り付

け、英語の通じぬ小型 3 輪タクシー (CNG) やこれも英語が通じぬ通勤バスに市民と一緒に押しくらまんじゅう状態になりながら乗り目的地へ向かった。協力隊時代に培った地元への適応力のお蔭である。調査は政府の機関から、病院、農村部、そして都市部のスラムでも行った。

日本ではありえない状態の病室や、歩道や線路脇ぎりぎりに軒を連ねるスラムの小屋はとても印象的だったが、そこで暮らす人々、特に子供の表情は明るく、人間の強さを教えてくれた。病気や犯罪にさえ巻き込まれなければ、日本で暮らす人より人生を楽しんでいるようにさえ見える。

3 週間視察・聞き取りを行ったが、バングラデシュに山積している問題の一片を垣間見ることが出来た。様々な要因が複雑に絡み合い、衛生環境の向上や女性のエンパワーメント、貧困からの脱出が拒まれているのが分かった。バングラデシュは今、経済発展が目覚ましく、日本企業も参入している。これから社会がどう変わるか興味を持って見ていきたいと思う。

最後に、この 3 週間の自主研修に協力してくれた現地の人々や、日本でサポートしてくれた方々に感謝したい。



アメリカでの一人暮らし

医学科第4学年 矢野 景子

今年、私は San Diego にある Sanford Burnham 研究所に行ってきました。San Diego で私が住んでいた地域は、サーファーの聖地と言われるほどとても海のきれいな街で、休みの日には多くの人がビーチで一日を過ごします。また大変過ごしやすい気候で、雨が降ることはほとんどなく、おまけに気温はいつも 20℃ 前後！本当に快適な夏でした。

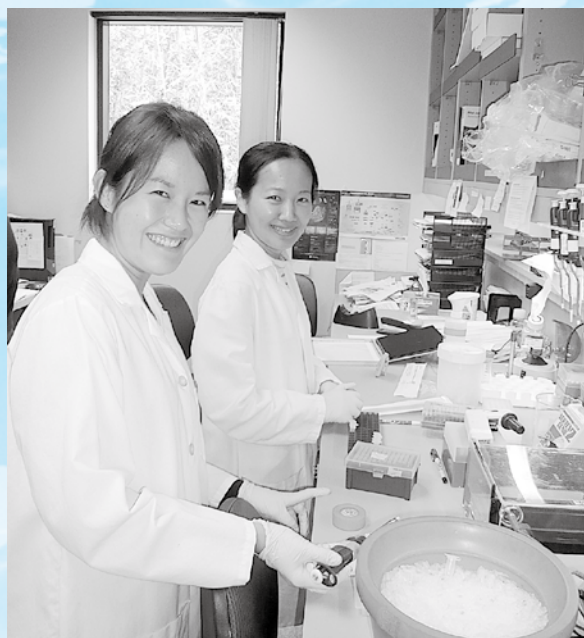
私は自主研修で海外にいきたいと一年の時からずっと思っていたのですが、どの分野に特に興味があるとかはなかったもので、Burnham 研究所は世界的に有名な研究所で色々な研究を見ることができると聞き、そこに決めました。

アメリカに一人で行くのは少々不安ではありましたが、日本人の先生が向こうにいらっしゃるということですから安心し、のうのうと日々を過ごしてしまい、結局行くまでにちゃんと勉強しなければと思ったものの、部活や大会、渡米の準備などで忙しいこともあり、大して勉強せぬまま出発の日を迎え、日本を旅立ちました。

私のホームステイ先は Betsy さんという方が一人で住んでいて、Sandie という犬と一緒に暮らしていました。Betsy さんはザ・アメリカのおばちゃん!! という感じで、とても面白くフレンドリーな方でした。一緒に映画をみたり、ごはんを食べたり、色々な話をしては夜更かししました。また、私がこのホームステイ先を決めたのは、犬がいるから、という単純な理由からなのですが、Sandie は本当に人懐こくて、私にとっては一番



ホームステイ先の Betsy さん



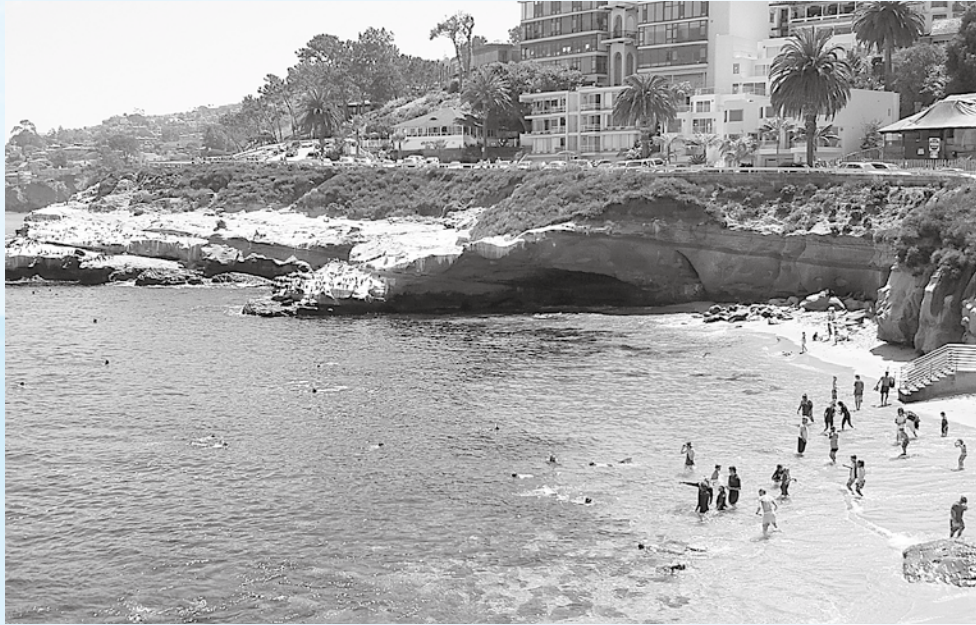
研究所での様子

の癒しでした。

Burnham 研究所は本当に大きな研究所で、およそ 10 棟のビルディングがあり、アメリカのみならず、ヨーロッパやアジアなど、たくさんの国から研究者が集まっていました。館内はとてもきれいで、カフェテリアなどの設備も充実していて、自由な雰囲気が漂っており、研究者にとって働きやすい環境だと感じました。皆さん熱心に自分の研究に取り組んでおられ、プレゼンの日はいつも活発に討論されていて、圧倒されました。

私は、Juan さんという中国人のアシスタントとして手伝いながら色々学びました。ほぼ勉強せずに行った私は、初め言われていることがさっぱりわからず、見様見まねで作業するだけでした。恥ずかしい話なのですが、dilution、centrifugation、medium…など基本的な専門用語すら知りませんでした。当然、実験内容は理解不能で、わからないことばかりで、毎日へとへとでした。

そんな私に Juan さんはいつも優しく、私が同じことを何回聞いても怒ることなく、とても丁寧に教えて下さいました。それでも分からない時は、先生のところにいった質問し、家に帰って



きれいな海

はネットで調べ…と日本で勉強しなかった分を挽回するため、毎日必死で勉強しました。おかげで、帰るころにはかなり理解できるようになり、Juanさんに褒められた時はかなり嬉しかったです。

ところで、私はこの研修で一人の日本人の方にとっても感謝しなければなりません。晴子さんという東京の歯学部の大学院生で、私のホームステイ先を紹介してくださった方です。今回私は一人で渡米したのですが、そんな私が寂しい思いをしないように、いつも気を使って下さいました。ホームステイ先から研究所までは遠かったのですが、毎日「ついでだから」といって、いつも送り迎えをして下さいました。土日には二人で色々なところに出かけました。Julian というアップルパイが有名な町や、Downtown、LAにあるディズニータウン、ショッピングなど・・・本当に楽しかったです。おまけに、晴子さんの友達が開いたパーティにまで私を招待して下さい、その友達とまで仲良くなることができました。

もし晴子さんがいなかったら、私はこんなにもSan Diegoを楽しめなかっただろうし、一人でふさぎこんでいたと思います。本当に感謝の気持ちでいっぱいです。

今回の渡米は私にとっての初めての一人旅であ

りましたが、晴子さんをはじめ本当に色々な方と巡りあえることができました。海外での自主研修というのは、言葉が壁となり、時にはつらいことや落ち込むこともあります。それ以上の楽しさが待っていると思います。今回 Burnham 研究所という、世界トップクラスの研究所で学べたことは本当に良い経験でした。海外自主研修を考えていらっしゃる方がいれば、是非いつてみてください。



犬の Sandie

カナダでの自主研修

医学科第4学年 山本 小百合

私は、9月4日から9月24日にかけて、上村舞衣さんと、VancouverのSt. Paul's Hospitalにて自主研修をさせていただきました。かけがえない思い出ばかりで、研修内容はもちろんのこと、カナダ文化まるごと含めて貴重な経験となりました。

【ラボでの研修】

研修させていただいた iCAPTURE centre は、British Columbia University の研究機関で、カナダでも有数の歴史ある病院 St. Paul's Hospital に位置し、呼吸器、循環器の研究を行っています。私達はその中のラボをいくつか回り、多方面から COPD や肺癌をはじめとした肺疾患についての勉強をしました。

肺標本の免疫染色、細胞培養、凍結標本の作製、Western blot のような基礎手法の実践から、肺の CT 画像の三次元化、micro CT 画像の観察、laser capture micro dissection (肺組織からある部分だけをレーザーで切り出す。顕微鏡の世界なのではじめは難しかったが、シューティングゲームみたいだった) の体験まで。実に多くの手法を学ぶことができました。また、Animal Facility という実験動物施設では、ラット、マウスの気管支に炎症物質を注入し、炎症の進行の程度やその抑制の方法を調べる実験にも関わらせていただきました。

研究のみだと思っていた私にとって驚いたことに、最終日には、St. Paul's Hospital の ICU の見学をすることに。日本にいたときですら ICU に行ったこともなく緊張する私達に、カナダのドクター達は気さくに話しかけて下さいました。1



Victoria の The Butchart Gardens



海辺のレストランでホストファミリーと

人の患者に多くの時間を費やし、大人数で熱く議論する姿が印象的でした。

研修の日々は、慣れない英語の専門用語に戸惑ったりもしましたが、様々な切り口から肺疾患を捉え、また最先端の研究を学ぶことができ、非常に充実したものとなりました。

【カナダでの生活】

何といたっても一番は、カナダでの素敵な生活を支えてくれたホストファミリー。去年に引き続き私達を受け入れて下さったご家庭は、いつも明るくおしゃべり好きのパパ Danny とママ Tessa、お茶目な中学生の女の子 Natasha です。親戚一同が集まるパーティーに参加させてもらって、おしゃべりしながらおいしいご飯やデザートを食べたり、また Vancouver の観光スポットを案内してもらって海辺で乾杯したり、一緒に買い物したり、時にはわざわざ家族でアイスクリーム屋さんに行ったりもしました (カナダのアイスクリームの種類は半端ない! しかも Natasha が毎日食べるほど本当に美味しい)。カナダへ行く前は英語でのコミュニケーションを心細く思っていたのですが、この家族のおかげで、そんな不安は払拭されました。慣れない英語でしたが、それさえ楽しいと感じるほどでした。ちなみに、カナダに、Nanaimo という地名があるんですが、「ナナイモ = seven potatoes」というジョークがホストファミリーのお気に入り、そこを通るたびに言っては爆笑でした (笑)。



歴史あるレンガの建物



先生方と美味しい中華料理屋にて



冬期オリンピックのトーチ

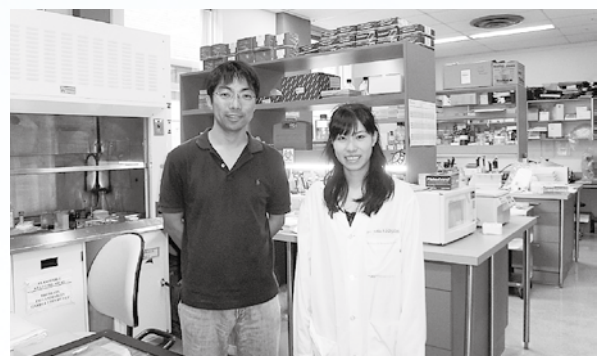
3週間、温かく楽しい家族の一員にさせてもらえて本当に嬉しく思っています。

私達は毎日、Danny に駅まで送ってもらい、そこから Tessa と一緒に電車で 40 分乗り、ラボまで通っていました。ラボの始まる時間が遅い時は、舞衣さんと一緒に Downtown の街歩きをして、おしゃれなカフェに入って美味しいコーヒーを飲んだり朝ごはんを食べたり。またランチも、数多くある世界中のレストランの、様々な料理を味わいました。カナダは移民の国とも言われ、これといったカナダ料理はありません。世界各国の文化が共存しているという印象を受けました。もちろん日本文化も少なくありません（これは日本じゃない、というような不思議なレストランも多いですが…）。料理に限らず、カナダ自体が優しく大らかで、私を含めいろんな文化を受け入れてくれる温かいものを感じました。休日には州都 Victoria にフェリーで一泊旅行へ行ったり、オリンピックの会場にもなった Whistler へ出かけたりもしました。自然が豊富で雄大な景色もカナダの魅力の一つで、感動したのを覚えています。

【本自主研修を通して】

今回主に私達を指導して下さいしたのは、iCAPTURE centre で研究されている 4 人の日本人の先生方でした。ご飯に連れて行って下さったり、歓迎会をして下さったり、大変お世話になりました。先生方は、留学をして研究をすることで、臨床にも通じる視野が広がったとおっしゃっていました。先生方との出会いは、私の世界観を変えると同時に、臨床に進みたい、と何となく考えていた私にとって、将来を考える上で非常に貴重なものとなりました。そして、カナダだからこそできたこの自主研修は、一生忘れられない素敵な体験となりました。これを糧として、これから様々なことに取り組んでいきたいです。

最後になりましたが、このような素晴らしい機会を与えて下さった中野恭幸先生、相浦玲子先生、Jacqui Brinkman さん、iCAPTURE の先生方、3 週間一緒に過ごした上村さん、ホストファミリーの方々はじめ、本研修に関わって下さった方々全てに心からお礼申し上げます。



様々な実験をしたラボ

滋賀医科大学奨学基金奨学生の決定

本学では、「滋賀医科大学奨学基金」による奨学生として、毎年、医学科2年～6年、看護学科の2年～4年の各学年から成績が優秀な者を1名採用し、奨学金として月額5万円を1年間給付することとしています。

平成22年度の奨学生は以下のとおり決定いたしました。

医学科第2学年	上野 亜希子
医学科第3学年	下畠 幸香
医学科第4学年	川口 高朗
医学科第5学年	大石 美穂
医学科第6学年	田中 仁美
看護学科第2学年	渡邊 奈利子
看護学科第3学年	谷川 温子
看護学科第4学年	浅葉 あずさ



奨学生に採用された感想

医学科第2学年 上野亜希子

奨学生に選んでいただき、大変嬉しく思います。励まし合って頑張ってきた友人、家族、ご指導下さいました先生方への感謝の気持ちを忘れず、今後も勉強やクラブ活動など、充実した生活を送っていききたいと思います。ありがとうございました。

看護学科第2学年 渡邊奈利子

今回、奨学基金奨学生として選ばれたことを大変光栄に思います。滋賀医科大学に入学できたこと、そして多くの素晴らしい先生方、友人達に支えられ、将来看護師として働く上で必要となる看護の専門知識や技術、様々な教養課程を学べることを本当に幸せに感じています。

これからも、奨学生の名に恥じぬよう、日々精進していききたいと思います。

医学科第4学年 川口 高朗

滋賀医科大学奨学基金の奨学生に選ばれたことを家族に報告した時、僕以上に喜んでくれました。「この笑顔のために頑張っていたんだな」と改めて思いました。

自分の考え方を話し合える親友、協力しあえるクラスメート、33期生は最高にいい学年です。

家族のため、仲間のため、そして、滋賀医科大学をより名門の大学にするために、今後も努力していこうと、今回の選考をキッカケに改めて想い直しました。

看護学科第3学年 谷川 温子

この度は、奨学生に選んでいただき、大変光栄に思います。大学生生活を日々支えてくれた友人、柔道部の方々、御指導くださった先生方、そしていつも応援してくれる家族には、感謝の気持ちでいっぱいです。

9月からは臨地実習が始まります。実習をさせていただいているという自覚を持ち、一つひとつの出会い、経験を大切に、看護を深めていきたいと思っています。ありがとうございました。

医学科第5学年 大石 美穂

諸先生方の御指導により、この度奨学基金をいただけることになり、心から御礼申し上げます。

五年生からは病院見学・実習も始まり、実際に講義で学んだことが臨床にも生かされているということ、医療にも限界がありまだまだ発展していく必要があるということ、多くの患者さんが様々な感情を抱えていらっしゃる事など、勉強以外の大切な事も多く学ばせていただいています。

医学の勉強はまだ始まったばかりですが、絶えず努力していきたいと思っています。

ありがとうございました。

看護学科第4学年 浅葉あずさ

今回、奨学基金をいただくことになりまして、大変嬉しく思います。

臨床実習に行かせていただくと、自分の知識・技術の少なさのために、壁にぶつかることばかりです。その中で、患者様やそのご家族の温かさ、強い思いに触れ、少しずつ「今」「その人」にとって必要な看護は何かを考えられるようになりました。

まだまだ、自分の憧れる看護師になるための道のりは長いですが、これからも患者様やそのご家族、現場の看護師さん、先生、友人、そして家族など、自分を支えてくれている人々に感謝の気持ちを忘れず、日々成長していきたいと思っています。

医学科第6学年 田中 仁美

奨学生に選ばれ、大変嬉しく思います。

これまで私を支えてくれた家族や友人、そして御指導くださった先生方に心から感謝いたします。今後も、理想の医師像を目指して日々精進していききたいと思います。

どうもありがとうございました。

ヨット部による追悼慰霊式

本学ヨット部は、去る平成4年9月11日(金)午後4時50分に琵琶湖で不幸にも遭難した故 嶋岡秀典君(入学年次：平成4年度(第18期入学))の慰霊式を今年は9月5日(日)の11時から嶋岡さんの御家族、馬場学長、ヨット部顧問の藤山教授他の列席の下、体育館前にある慰霊碑前にて行った。

当日は、真夏を思わせる猛暑の中、ヨット部 OB 他関係者約40名の列席のもと、ヨット部主将の医学科第3学年井本博之君から部活の安全対策に対する誓いの挨拶があった。



2010年 嶋岡さん追悼慰霊式

ヨット部主将 医学科第2学年 井本 博之

現在滋賀医科大学ヨット部には総勢24名の部員がおります。部員数が数名程度であったことを考えると、主将として大変心強くこれからの一年が楽しみです。一方で、部員数が増えるにつれて安全に関してより一層の注意を払わなければなりません。今年も全回生で安全対策を行いました。これから秋に向かい風速が増し、水温が低下してまいります。OB、現役一丸となって安全対策を徹底してまいります。

私たちは、嶋岡秀典さんのヨット部への思い、ご家族の方々の思いを真摯に受け止め、現在のヨット部がありますことを感謝すると



ともに、二度とこのような悲しい事故を起こさないことを誓います。

最後になりましたが、嶋岡秀典さんの安らかな御冥福を心よりお祈り申し上げます。



「里親GP」県民公開講座を開催

里親学生支援室では、『地域「里親」による医学生支援プログラム』（略称：里親GP）事業のシンポジウムとして、9月26日（日）にホテルピアザびわ湖（大津市）で、大学を主催に県民公開講座（テーマ：滋賀の医療と医師、看護師養成を考える）を開催しました。

学長の挨拶、埴田室長による事業報告の後、各方面からお招きしたシンポジストの方々（下記のとおり）に、短い時間ではありましたが、それぞれのお立場からテーマに沿った形で、現状の報告や今後の方向性などについてスライドを交えてご講演いただきました。

また、「里親GP」に対しては、今後の期待も込めて高い評価をいただきました。

後半では、「里親GP」の成果を発展させたNPO設立を本学が計画していることに対して、プチ里親や行政の方などから大変貴重なご意見をいただくなど、活発な意見交換が行われました。

行政、医療関係、里親・プチ里親、各種団体の方など、約60名のご参加をいただき、大変有意義な公開講座となりました。



学長のあいさつ

シンポジスト

滋賀県長浜保健所	所 長	嶋村 清志	先生
滋賀県医師会	副会長	小鳥 輝男	先生
滋賀県病院協会	会 長	富永 芳徳	先生
滋賀県看護協会		中西 京子	先生
滋賀医科大学		服部 隆則	副学長



講演の様子



意見交換の様子

保健管理センターだより

保健管理センター 講師 小川 恵美子

4月16日より保健管理センターに着任しました、小川恵美子です。これまでに、健診結果等で面談をした学生さんや、いろいろな機会でお会いした職員の方も多いと思いますが、改めてご挨拶申し上げます。専門は内科（呼吸器内科）で特に喫煙関連疾患の慢性閉塞性肺疾患（COPD）を専門としております。

さて、昨年は、新型インフルエンザの流行で、実際に罹患した方、診療に従事された先生方がたくさんいらっしゃいます。日本では、幸い、予想されていたような事態には至らず、死亡率も低く抑えることができました。日本では、早期に診断され、抗インフルエンザ薬が投与されたことが、死亡率の低下につながったと考えられています。本年もそろそろインフルエンザ対策が行われる時期が参りました。まずは予防が大切です。日ごろから、うがいと手洗いを習慣づけ、可能な限りワクチンを受けましょう。特に臨床の現場に係る学生さんや職員の方々は接種されることを推奨しております。

感染症といえば、2007年に麻疹が関東で大学生に集団発生したことを記憶されている方も多いと思います。麻疹は小児期にかかる感染症と考えられていました。以前は、幼少時に感染し、自然に免疫のついている人が多い疾患でした。その後、ワクチン接種が進み、麻疹罹患率が下がりましたが、ワクチンの接種をせずに成人してきた若者を中心に集団感染が occurred しました。日本は麻疹輸出国と揶揄されたこともあるのでしょうか、政府は2012年に麻疹撲滅を掲げ、対策が打ち出されております。具体的には、2008年4月から5年間の移行措置で、中学1年生と高校3年生に相当する人が、MR（麻疹・風疹）ワクチンが定期予防接種の適応となりました。実際に大学1年生、2年生の中には、高校3年生時にMRワクチンを接種してきている人も多いと思います。ちなみに、幼児については2006年4月から、小学校入学までに2回接種する定期接種となりました。



守山の湖岸から望む比良の暮雪



春の琵琶湖疏水



湖岸に広がる菜の花畑

この記事に目を通していただく方の中には、医療従事者や今後医療の現場で働く人が多いと思います。近年、医療現場での感染対策が注目され、対策が行われております。麻疹や風疹、流行性耳下腺炎（おたふくかぜ）、水痘（みずぼうそう）についてもどのような人を対象にワクチン接種を勧めるかといった、院内感染対策としてのワクチンガイドライン（第1版）も作製されております。このガイドラインによればワクチン接種は原則2回施行することを推奨しております。

現在、病院感染対策チームと保健管理センターで話し合いを行い、今後、病院職員や実習を行う学生について、どのような基準を設けていくかを検討しております。学生さんについては、入学時に各自で抗体検査をしてきていただいておりますが、既往歴やワクチン接種歴と合わせて、附属病院の基準が決定し次第、附属病院で実習するのに必要なワクチン接種を個別に指導していきたいと思っております。

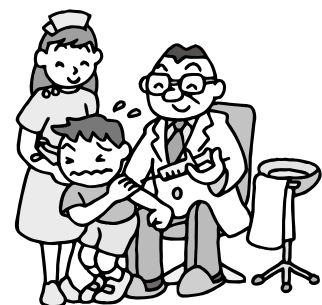


烏丸半島の湖水面に広がる蓮の群生

ワクチンによっては、発熱や発疹といった副反応が出ることもありますので、比較的体調がよく、時間に余裕のあるときに、計画的に接種を進めるようにしてください。また入職時や実習前には、B型肝炎ワクチン接種（一般に3回接種します）が必要となる方も多いと思います。それらも考慮して計画を立てておく必要があります。疾患によりワクチン接種が困難な場合など相談のある方は保健管理センターへご相談ください。

ワクチン接種歴や既往歴の確認には、母子手帳の確認が必要となります。最近ワクチンを接種した方も、しっかりと記録を残しておくようにしてください。（ちなみに、1989年4月から1993年3月までは、無菌性髄膜炎が問題となった新三種混合ワクチン（MMR（麻疹・風疹・流行性耳下腺炎））を接種している方もいらっしゃると思います。これは現在も幼児に施行されている三種混合ワクチン（DPT（ジフテリア・百日咳・破傷風））と異なりますので、混乱しないように注意が必要です。母子手帳？？？という方も多いと思いますが、確認が取れなければ、ワクチンを接種していただくことになるかもしれません。（10月初めの段階では決まっておりません）

最後になりましたが、これからもよろしくお願い申し上げます。



インフォメーション

平成22年度 医学科第2年次後期学士編入学宣誓式 並びに 平成22年度 秋季大学院医学系研究科博士課程・ 修士課程入学宣誓式

去る10月1日(金)午前10時から、本学管理棟大会議室において挙行されました。



告 辞

滋賀医科大学 学長 馬場 忠雄

本日、平成22年度滋賀医科大学医学科第二年次後期学士編入学および秋季大学院医学研究科入学宣誓式を挙行できますことは、本学教職員と在学生にとって大きな喜びであります。本日は第37回目の創立記念日でもあります。学士編入学の17名の皆さん滋賀医科大学入学おめでとうございます。

本日よき日を迎えられたのは、今までの経験を医学の道に生かし、医学研究や医療において大いに活躍したいという「志」をもって、不断の努力を重ねてこられた結果であります。そして、その「志」を理解し、経済的にも精神的にもサポートされた御家族はじめ関係各位の励ましと協力の賜物と思います。改めて皆様方に感謝し、それに報いるべく、本学において「志」を達成するため一層自分自身を磨いてください。

まず、三つのことを申し上げたいと思います。

一つは滋賀医科大学の目指している方向を十分に理解して活用して下さい。

本学は、1974年10月1日に創立され今年で37年となります。現在まで医学科卒業生は2,909名を数え1,013名約35%が本県の医療に従事し、卒業生の29名が、国公私立大学の教授として教育研究に活躍し、地域や大学から信頼を得ています。

医学を学び、医療界で研究や臨床、あるいは地域医療に貢献しようとする熱い情熱を持って入学された皆さんに対して期待に添うべく、本学の教職員は勿論のこと地域の方々も支援を惜しまないことを約束します。

本学の医学教育の基本は「地域基盤型教育(Society-based Education)」であり、地域のボランティアの方々に、生活面から教育診療まで幅

広く関与し、参加、支援していただいております。さらに、諸君の今までに学ばれた豊かな知識と考え方を在学生との交流のなかで生かしていただき、知の刺激を与えて下さい。他領域の学問との交流を通して思考過程に多様性が生まれ、そこから新しい展開が開かれることもあり学士編入学生の役割に期待しています。医学教育では知識(Science)と技能(Arts)の基本を教育し、研究と診療に役立てると共に、生命に対する倫理感(Ethics)を養うことを目指しています。一般社会の人々の目線で感じとることを学んで下さい。

今、ご承知のように地域医療の崩壊が各地で生じており、本県においても同様の事態が生じております。そこで滋賀県も第3学年から産科、小児科、麻酔科を希望する学生に奨学金を与え、支援を行っております。また「地域医療システム学講座」や「総合がん治療学講座」の寄付講座を設置していただいております。今年度から地域医療再生計画で、東近江医療センターに「総合内科学講座」と「総合外科学講座」を設置し、現在、教授の選考を行っているところであります。また、国保連合会においても第4学年から奨学金を用意していただいております。これらを活用していただければ幸いです。滋賀県は日本の中央に位置し、人口増加県であり、琵琶湖を囲んで自然環境に恵まれ、東京、京都、奈良に次いで旧所名跡も多く存在して、充実した学生生活が送れます。

第二に「いのちの感性」を養ってください。

医学教育及び医療においては、知識と技能を習得しただけでは通用しません。最も必要なことは、倫理感であります。六年一貫教育では、早期体験実習や医学概論、献体受入など、また里親制度な

どを取り入れています。本学ではリベラルアーツを大切にしています。大学教育大綱化以来教養部が廃止されたことは、我が国の大学の大きな損失であったとの意見がありますが、私も全く同感であります。医師として臨終に立ち合って、おなくなりになりましたという客観的な言葉だけでは、遺族の方々は満足しないと思います。

福井県名田庄診療所長中村伸一先生は、僻地の診療所に赴任して、19年間の活動を通して患者を自宅で看取った体験を、著書「自宅で大往生」にまとめています。そのなかには、亭主関白だった夫は、妻に、「これまでありがとう、家で死ねて、えー人生やった。お前も最後は中村先生に、ここで看取られて死ぬ人生やぞ」といっております。中村先生には、ご臨終ですという言葉はないようです。「さようなら、おつかれさまでした。」これは長い年月にわたって心を通わせ、最期を看取ってきた中村先生以外にはいえない言葉だと思います。中村先生は大病院の手術の上手な外科医ではありませんが、地域医療にしか見い出せない大切なもの、それは、患者と医師の信頼関係から生まれる医師としての充実感であるといっています。医師の患者に接する態度が重要です。

第三には、「自身の原点」を忘れないでください。

診療に携わるにしても、研究の道に進んでも医療の世界は大変厳しいものがあります。診療においては、患者が主体で7時間45分の労働時間で済むものではなく、日夜勤務時間にとらわれない状況です。医療の現状は、労働条件、賃金、診療報酬など多くの課題をかかえており、解決するにはまだまだ時間が要するように思います。しかし、医学部を目指された原点は、高収入、高い地位、安定した職業ということではなく、病に悩む人を少しでも手助けしたいという「志」であると思ひ

ます。苦しい、厳しい状況におかれても100%努力することで、自分自身が心から満足できる達成感が得られるものと思います。

初心を忘れることなく、「志」を高く持ち続け、信頼される医療人として本学で成長され、地域にその成果を還元してくれることを祈念します。

平成22年度秋季大学院医学研究科博士課程入学者3名、修士課程入学者1名、ご入学誠にありがとうございます。

秋入学については、平成20年度に文科省より補助金を得て、大学の国際化を目指し、調査を行ってまいりました。外国からの入学生を迎えるのには、秋入学は適していること、また、わが国では4月では初期研修を終わって、後期研修に入るところであり、研究の時間がどれだけ取れるかわからないこともあって、大学院に関心があってもなかなか決心がつかないと思われ、今年度初めて秋入学を取り入れることになったのであります。大学院教育においては、実質化が叫ばれ、講義、演習など論文作成に必要な知識と操作技術の習得が重視されています。しかし、本来の役割は、独創的な研究の芽をつかみ、それを伸ばすことであります。社会人入学においては、勤務との両立になり、大変忙しくなるとは思いますが、絶えずtry and errorで大きな壁に立ち向かって乗り越えて下さい。「温故知新」という言葉があります。自分の研究分野の文献を詳しく調べ、指導者や同僚との議論を経て、自分の工夫を加え、一筋の道を見つけ出して新しい知見をつけ加えて、少しでも医療の道に生かせるよう努力して下さい。大学院での教育研究の成果を大いに期待しております。

以上、告辞といたします。

平成22年10月1日



第36回 解剖体慰霊式

去る10月28日(木)午前10時から本学体育館において、ご遺族、ご来賓、しゃくなげ会会員及び教職員・学生約600名の参列の中、厳かに第36回滋賀医科大学解剖体慰霊式を執り行いました。

このたびは、系統解剖40霊、病理解剖42霊、法医学解剖87霊、計169霊を新たにお祀りし御霊のご冥福をお祈りしました。

慰霊式は、出席者全員で御霊に黙祷を捧げ、諸霊芳名拝誦、馬場学長及び学生代表による慰霊の辞、高橋しゃくなげ会理事長の献辞、出席者全員による献花が行われました。

最後に、ご遺族代表のご挨拶に続き、本学教授代表として病理学講座の小笠原教授から挨拶があり、閉会となりました。



会場の様子



馬場学長による慰霊の辞



出席者全員による献花が行われました



SHIGA UNIVERSITY OF MEDICAL SCIENCE
勢多だより
Nov 30, 2010

編集後記

今年は猛暑が続いた後に急に冷え込み、短い秋となりそうです。秋といえば「若鮎祭」ですが、今年度も実行委員会の学生さんを中心に丁寧な準備がなされ、学生や教職員だけでなく近隣の方々も数多く参加された素晴らしい催しとなりました。自分自身の学生時代を振り返ってみると学祭にはあまり積極的にかかわった覚えがなく、実行委員や協力者として熱心に若鮎祭をつくりあげていく学生さんの姿を見て、毎年とても感心しています。

講義や実習だけでなく、こうした学生時代の催しやクラブ活動等を通じて、協力・協同の姿勢を身につけた医療人として成長してくださることを願っています。

編集委員長 宮松 直美

（勢多だよりの由来）

勢多は勢田、世多、瀬田とも書かれるが、古代、中世の文献では、勢多が多用されている。それに勢多は「勢(いきおい)が多い」という佳字名称である。従って、いきおいが多かれと願う本学関係者の想いにぴったりということで、瀬田とせずに、あえて勢多とした。

（題字は、故 脇坂行一初代学長による）

勢多だより No. 88

発行年月日：平成22年11月30日

編集「勢多だより」編集担当者会議

発行：滋賀医科大学広報委員会



滋賀医科大学
SHIGA UNIVERSITY OF MEDICAL SCIENCE

学章の説明

「さざ波の滋賀」のさざ波と「一隅を照らす」光の波動とを組み合わせたもの。
「中心に向かって、外からさざ波の波動－これは人の医への期待である。外に向
かって中心から一隅を照らす光の波動－これは人々の期待に返す答えである」。